



北海道特集

～遙かなる大地の恵み～

北海道の名所、名物などというものは、雪まつり、函館の夜景、海鮮、他にも余るほどにあるが、道民だけではなく道外の人が思い浮かべるものの一つに、ジンギスカンが挙げられるだろう。道内179市町村で愛されるそれは、正にどさんこのソウルフードだ。ジンギスカンが北海道に根付いたのは戦後。その歴史を見ていこう。

大正7年、軍服の製造に必要な羊毛を取るための種羊場が、月寒や滝川などに開設された。ヒツジは同時に食肉としての利用も図られたが、当時の北海道では受け入れられなかったようだ。羊肉独特の臭みが作用した節もあるのだろう。

それから数十年かの時を経て戦後、綿羊を育てる農家が増えてきた。その際、老いたヒツジを食べるために臭み消しとして考案されたのが、醤油をベースに玉ねぎ、りんご、生姜などをすり下ろして加えたタレに羊肉を漬け込む、というもの。松尾ジンギスカンはその代表格だ。

また、ジンギスカンは我らが月寒とも大きく関係している。「外で食べてこそ」のルーツは、農業の専門学校、月寒学院（現・八紘学園）にある。昭和28年に学院理事長が政財界の大物を集め、野外で肉を焼く宴を催したのだ。この年に学院で発足した成吉思汗クラブの流れを継ぎ、ツキサップじんぎすかんクラブが学院内で店を開いている。

地域で親しまれる食に、そこはかかない嬉しさを感じるのは、歴史があるからだろうか。外で家で、家族と仲間と、ときには一人で。郷土料理の煮詰まった愛である。（ ）

参考文献：『北海道遺産完全ガイド』 佐藤圭樹著 / 北海道新聞社



人間の美点をそぎ落とし、人間と罪、ひいては神にせまる小説。私がそう感じる作家が、遠藤周作です。一九二三年生まれ。キリスト教の洗礼を受け、十代後半で戦争を経験し、キリストと信仰を主題にした作品を多く残したキリスト教作家として知られています。私が彼の作品を通して感じるのが、「人間の汚点を描こうとする」強い意識です。人の「罪悪」を辿る彼の作品は、人物において、目を背けたくなるような人の心身の汚い部分の描写をします。あえて「人の美点」の描写を避けているかのようです。彼は特に日本人の「罪意識の欠如」に批判的です。「黄色い人」「海と毒薬」等の作品で顕著なこの姿勢が、私には「日本の敗戦」によって培われたもののように思えるのです。戦争の中でまかり通っていたあらゆる罪が、「敗戦」したことで浮き彫りになり、罰せられる姿が見えてくるような気がしてならないのです。戦争で狂わされた「良心の呵責」の欠けた世間、そこで生きる哀しさ。遠藤周作の文学はそこで生まれ、広がっていったのかも知れないと、私は考えています。さてそんな遠藤周作ですが、自らを「世のために何一つ成さず、ぐうたら生きる狐狸庵山人」と称し、エッセイも多数著しています。小説の暗さは欠片もなく、ユーモアと自論が詰まったエッセイで、垣間見える他作家との思い出も面白いところ。彼が何を見、何に怒り、何を選びとってきたのか。その答えを、彼の作品で探してみませんか。（ ）

思想を盗め！

ぐうたら山人が描く罪と人間 遠藤周作



心に移りゆくよしなしごと

このコーナーでは、局員が自身の体験や見聞を通して思ったこと、考えたことを、「そこはかとなく」書いた「エッセイ」を紹介していきます。

” シャーペンの” 消しゴム

” シャーペンの” 消しゴムを使うときに感じる罪悪感、この気持ちはなんだろうか。汚れてみすばらしくなった消しゴムを見ると、僕は取り返しのつかないことをしてしまったんだと落ち込んでしまう。まさか、消しゴムの純白を保つことが僕の使命ではないだろう。しかし、そう思ってしまうほどに、僕のシャーペンの消しゴムに対する認識が罪悪感を刺激してくる。

同じ気持ちを感じる出来事はもう一つ、シャーペンのガイドパイプを折ってしまったときだ。これは言わずもがな、シャーペンが破損してしまっているため罪悪感を感じるのは当然のことなのだが。つまり僕は、シャーペンの消しゴムを使うことをシャーペンの破損だと認識しているのだろう。

そんな僕だが、ついに消しゴムの使用を許してくれるシャーペンと出会うことができた。そのシャーペンは消しゴムにフォーカスしているシャーペンで、長くて消しやすい消しゴムが使われている。消しゴムを使わないなどありえない、そう語りかけているようだった。このシャーペンは、僕のような罪人に救いをもたらしてくれるイエス・キリストだ。今度お小遣いをもらえたら、ロフトまで許しを請いに行こうと思う。（ ）

図書委員のおすすめ本

『言葉にできない想いは本当にあるのか』 いしわたり淳治著 / 筑摩書房

この本は、作詞家として有名な『いしわたり淳治』さんの新聞のコラム連載をまとめたものです。世の中にあふれる様々な言葉を著者が紐解いていきます。言葉を生業としているからか、一つの言葉から受けとる印象や違和感にとっても敏感で、私たちが普段つかっている言葉の不思議さを感じることができます。読んだ後は、きっといつもより言葉選びや感情を言語化する時間を丁寧に楽しめると思います。



『この気持ちもいつか忘れる』 住野よる著 / 新潮社

この本は、「君の臍臓をたべたい」の著者でもある住野よるさんが書いた作品です。主人公の男の子が、ある日の夜にバス停を見つけ、そこで出会う女の子と惹かれ合う物語を描いています。でも、その女の子の姿が見えなかったり、2人はバス停でしか会うことができなかったりなど不思議なことがたくさんあります。住野よるさんならではの独特の世界観とストーリー性を味わうことができると思うのでぜひ読んでみてください。あとこの本には物語にあった曲が収録されたCDがついているので、気になる人はぜひ本屋さんで買ってみてください。



『英単語の語源図鑑』

清水建二・すずきひろし著 / かんき出版

私が紹介するのは「英単語の語源図鑑」という本です。この本は英単語の派生語の仕組みを理解することができます。日本語の漢字の部首を見て意味を理解するように、英単語に対しても語源をもとに判別する習慣がつくと思います。この本で語源とイメージにより暗記の負担を抑えることができるので、オススメです。図鑑という名の通り、図鑑形式でキャラクターの動きのイラストを交えながらなので、分かりやすく、たくさんの発見があります。



片言隻語

7月も後半ですが、北海道にもかかわらず湿気の多い暑さが続いています。暑くても北海道にはエアコンのない家が意外とありますよね(あっても使わない猛者もいるようですが)。学校に設置されているのも扇風機ですから「しょぼい」と感じる人もいると思うのですが、「風」を受けることでかなり体感温度は変わっているのです。例えば気温30度、湿度70%、扇風機(風速2.9m/s)をつけると、なんと体感温度は25.5度となります…！これは「ミスナールの計算式」で求めました(計算は他力)。とりあえずこれを読んだあなたは扇風機の前を占領して月高の夏を乗り切りましょう。（ ）